

信州大学教育学部における
学生の満足度調査報告書
(2016年度～2018年度)

信州大学教育学部自己点検・評価委員会
2020年（令和2年）2月

信州大学教育学部における学生の満足度調査報告書目次

はじめに

(自己点検・評価委員長 佐々木 洋城)

1. 調査概要	1
(1) 調査内容	1
(2) 調査対象	1
(3) 調査方法	2
(4) 回収結果	2
2. 調査結果の要約	3
3. 過去3年間の年度別調査の分析	6
(1) 教育学部が目指す教育研究の実現度合	7
(2) 授業内容、実施・評価方法等の満足度	9
(3) 大学での学習と生活の充実度	18
(4) 教育の充実のために何が重要か	21

はじめに

本学部では学部卒業生に対する満足度調査を2004年度から実施し、年度報告書を作成するとともに、3年毎にまとめの報告書を作成してきました。本報告書はその5回目となります。本調査に協力して下さった多くの学生諸氏に感謝するとともに、本報告書の作成にご協力いただいた多数の教職員のみなさまに心からお礼を申し上げます。

満足度調査は学部教育改善のための計画・実行・評価・改善といういわゆるPDCAサイクルの一環として長期間にわたって実施してきました。過去の記録を顧みるとき、学生諸君の学びの足跡と先輩諸教職員の努力を彷彿させてくれます。今回もこの3年間を振り返り、学生諸氏の4年間を通しての成長と学部の課題を改めて浮かび上がらせてくれました。

これまでも、この調査により明らかになった問題や課題に対して、学部内で共有し、解決が図られてきています。さらには、本学部の方向性にも関わる長期的な視野での戦略を立てる上でも本調査は貴重であります。

従来からも指摘されてきていることですが、このPDCAサイクルのA、すなわち、改善を何らかの形で「可視化」し発信することは卒業生諸氏にも喜ばれることではないかと思ひますし、現役学生にとっても学部教育への主体的な参加へのモチベーションを高めることにもつながると思ひます。さらには、大学がおかれている現状を鑑みれば、このPDCAサイクルのAの成果を発信することは喫緊の課題であるといえましょう。

今後も本調査を継続し、学生諸氏の大学・学部の教育に対する期待にこたえるべく私たちの課題を探るよすがとしていかなければなりません。

2020年2月 信州大学教育学部自己点検・評価委員会委員長
佐々木洋城

1. 調査概要

(1) 調査目的

本調査は信州大学教育学部に在籍している学生を対象にして、教育・研究体制に対する考え、カリキュラムや授業の満足度、大学での学習と生活等についてその実態を把握し、今後の教育学部のあり方を探るための基礎資料を得るとともに、学部改革の指針に活かすことを目的とする。

本学部はこれまで長野県における唯一の国立教員養成系学部として、長野県を中心とした教育界に多くの卒業生を輩出してきた。卒業生の教員就職率は全国でも上位にランクされているとはいえ、社会・経済状況の急速な変化を背景として、学校教育における教員の教育問題への対応能力が問われている。現状に即応した教育・研究体制の再構築が求められる。

本調査では、教育学部における専門教育や研究を学生がどのように受け止めているかを把握し、調査結果を生かした教育・研究を探るものである。

(2) 調査内容

本調査では「4年生用」の調査票を作成し3年間同じ項目で調査を実施した。調査票の質問項目は、それぞれの特性に応じた質問項目を準備した。具体的には以下に示すとおりである。

【共通項目】

・ 回答者の属性:4項目

入学年度、性別、入学・進学経路、学修分野

・ 教育学部の教育研究についての考え:3項目

本学部が目指している「臨床の知」「附属学校園の活用」「地域社会との連携」に即し教育が行われているかを尋ねた。

・ 講義等の満足度:20項目、自由記述

「1年次の講義科目」「講義・演習科目」「臨床経験科目」「授業のあり方・その他」に区分して、満足度を尋ねた。さらに「やや不満足」「不満足」の内容と改善点について自由記述で尋ねた。

・ 大学での学習と生活:6項目

系統的な授業履修、課外活動・ボランティア経験、学ぶ意義などの状況を尋ねた。

・ 教育学部の教育の充実:6項目

単位互換制度、授業の選択、現場経験、シラバス改善などの重要性を尋ねた。

・ 教育学部の問題点・改善点:自由記述

「教育学部の施設・設備」「教育学部の教員や事務職員の対応」「所属専攻や分野の組織や指導体制」の3項目について、自由記述で尋ねた。

・ 教育学部に言いたいこと、主張したいこと:自由記述

本調査票に欠けている視点や意見、教育学部のあるべき姿などについて、自由記述で尋ねた。

(3) 調査対象

本調査の対象者は信州大学教育学部に在籍する4年生である。調査対象者数は次のとおりである。

2018年度に4年生である者	265名
2017年度に4年生である者	318名
2016年度に4年生である者	309名

1. 調査概要

(4) 調査方法

調査は学部自己点検・評価委員会が主体となり、調査目的に即した調査項目を作成した。

調査期間と配布方法については、2016年度は、2015年度に引き続き、教職実践演習授業担当教授の協力を仰ぎ、2016年1月の最終授業時にアンケート用紙を配布し、回答させた後、その場で回収した。2017年度からは集計の簡便さを考慮し、google formを活用している。しかし、回収率は大幅に低下してしまった。この方式をとりつつ回収率を上げるために工夫が必要である。

(5) 回収結果

対象別の有効数と有効票の性別構成は次のとおりである。

	対象者数	回答数	回答率 (%)	性別構成 (%)	
				男	女
2018年度	265	122	46.0	45.9	54.1
2017年度	318	148	46.5	42.6	57.4
2016年度	309	250	80.9	47.8	52.2

2. 調査結果の要約

2004年度から信州大学教育学部に在籍している学生を対象にして、教育・研究体制に対する考え、カリキュラムや 授業の満足度、大学での学習と生活等についてその実態を把握し、今後の教育学部のあり方を探るための基礎資料を得るとともに、学部改革の指針に活かすことを目的として本調査を実施してきた。2007年度、2010年度、2013年度、2016年度の報告に続き、今回は5回目の報告となる。今回の調査結果の要約を以下のとおり示す。

◇教育学部の教育研究についての考え

教育研究について、まず、「臨床の知」の理念に基づいた授業科目が「十分あった」および「まあまああった」との合計回答は、2016年度90.8%、2017年度85.8%、2018年度90.1%であり、平均で88.9%と高い値を示した。また「附属学校園の活用」に即した授業科目が「十分あった」および「まあまああった」との合計回答は、2016年度93.2%、2017年度91.2%、2018年度83.6%と高い数値である。このように、授業科目の編成については概ね受け入れられているといえる。しかし、「附属学校園の活用」に即した授業科目については、やや減少傾向を示していることに注意したい。「地域社会との連携」については、その目的に即した授業科目が「十分あった」および「まあまああった」との合計回答は、2016年度85.5%、2017年度74.4%、2018年度81.1%で、平均80.3%と高い値を維持している。前回の調査では6割程度であったからかなりの改善がはかられたようである。

◇講義等の満足度

「A 共通教育科目の内容」については、2016年度には85.1%が満足（「十分満足」「やや満足」）と回答しており、2017年度には81.1%、2018年度には83.6%と高い満足度を維持している。

「B 専門科目（臨床科目を除く）の内容」については、2016年度には82.7%が満足（「十分満足」「やや満足」）と回答しており、2017年度には75.7%、2018年度には86.0%であり、前回の調査での数値より高い値を示している。高い満足度が伺える。しかし一方、「不満足である」との回答が、3年間一定数の割合（4.0～4.1%）あることも留意しておく必要があるであろう。

「E 高校での未履修科目への配慮」については、2016年度には63.9%が満足（「十分満足」「やや満足」）と回答しており、2017年度には56.8%、2018年度には64.0%であった。高校での未履修科目への配慮が今後も望まれる。

「F 所属分野における専門科目」については、2016年度には91.6%が満足（「十分満足」「やや満足」）と回答しており、2017年度には93.9%、2018年度には94.3%と、9割を超える高い満足度を維持している。

「G 所属分野における研究指導」については、2016年度には83.9%、2017年度には85.9%、2018年度には87.7%が満足（「十分満足」「やや満足」）と回答しており、高い値で増加傾向を示している。

「I 教職科目（臨床経験科目を除く）」については、2016年度には85.1%が満足（「十分満足」「やや満足」）と回答しており、2017年度には81.1%、2018年度には86.9%と高い満足度を維持している。

「K 教育実習 事前指導」において、2016年度では84.3%が満足（「十分満足」「やや満足」）、2017年度では80.4%、2018年度では84.4%が満足と回答した。

2. 調査結果の要約

「L 教育実習 事後指導」については、2016年度は81.9%、2017年度は80.4%、2018年度は84.4%が満足（「十分満足」「やや満足」）と回答し、「K 教育実習 事前指導」と同程度の値となった。

「M 教育実習」については、受講者の評価は圧倒的に高い。2016年度は満足（「十分満足」「やや満足」）が95.2%、2017年度は95.3%、2018年度は94.2%が満足としていた。特に、十分満足の割合が、3年間平均で約6割あり、教育実習そのものの満足度が十分に高いことが示されている。

◇授業の在り方・その他

「P 学生の理解度などをみながら授業を進める工夫」については、7割前後で満足（「十分満足」と「やや満足」）は推移している。2016年度は70.5%、2017年度は63.5%、2018年度は74.6%が満足としていた。

「Q 適宜課題を出すなどして、理解度・応用力をみる工夫」については、8割前後で満足（「十分満足」と「やや満足」）は推移している。2016年度は79.7%、2017年度は77.7%、2018年度は83.7%が満足と回答した。

「R 成績評価の方法」については、8割以上の満足（「十分満足」と「やや満足」）を維持している。2016年度は84.2%、2017年度は80.4%、2018年度は87.7%が満足と回答した。

「S 就職や進学のための支援や指導」については、6割前後で満足（「十分満足」と「やや満足」）は推移している。2016年度は60.7%、2017年度は58.7%、2018年度は59.9%が満足としているが、「不満足」の割合が1割強と高く、今後も支援や指導の改善が望まれる。

◇大学での学習と生活

「A 自身の将来を見通し、系統的な履修ができた」については、2016年度から2018年度にかけて、79.1%から86.9%と順調に伸びてきているので、2012からの新カリキュラムの成果が出てきていると考えられる。これに対して、「F 免許や資格の単位取得に追われ、専門分野の学びが疎かになった」では、否定的な意見（「とてもそう思う」「ややそう思う」）2017年度54%、2018年度54.9%と徐々に増え始めている。

このほか「D 教育実習などの実践的経験と講義内容とを相互に関連させつつ学べた」では肯定的な回答（「とてもそう思う」「ややそう思う」）が順調に上昇して2018年度には94.2%に達した。

「E 大学生活全般を通して豊かな知との出会い、学ぶことの意義を味わえた」でも肯定的な回答（「とてもそう思う」「ややそう思う」）がほぼ順調に上昇し2018年度では90.2%に達した。

これらは担当者の努力の結果であると言えよう。

◇教育学部の教育の充実

「B 取得単位の上限の厳格化を徹底し、受講科目を絞る」については、徐々に増加し、2018年度は43.4%である。しかしながら、全体とすれば否定的な回答（「あまり重要でない」「全く重要でない」）が55%を割っておらず、授業数を絞ることなく広く学びたいと願っているようである。

「D 実践経験を専門的な視点を交えて振り返る機会を増やす」という設問については、肯定的な回

2. 調査結果の要約

答（「とても重要」「やや重要」）が8割を超え、特に2018年度は9割を超えた。すなわち、実践に基づき専門分野について深く学び、それを生かしたいと考えていることが読み取れる。

「E 自然教育や環境教育に関連する科目を増やす」については、肯定的な見方が変動はあるが、2018年度には75.4%にまで増加した。

◇自由記述での意見他

授業内容、実施・評価方法等における問題点については小中両免取得の見直しや提案についての意見がある。1年次に専門科目を学びたいという要望は変わらずある。2年次以降の時間割の過密さを理由にあげる意見が多数であるが、学びに向かう意欲や副免許取得を理由とする意見があることに留意したい。現在も、専門科目を1年次に設定しようとする不断の努力が続けられているが、今後も4年間のカリキュラムを検討する必要がある。また、「授業改善が必要」とあるとの回答には、授業内容と実践との結びつきの明示や、授業の連携、成績評価の在り方などの指摘がある。臨床経験科目、とりわけ教育実習事前・事後指導についての要望は前回同様回答が多い。「教採対策が不十分」「就職支援が不十分」と感じている学生の意見も前回同様にある。

施設・設備の現状とその問題点では、体育館、図書館の改修を要望する回答が、前回同様寄せられている。また、図書館、生協・学食については、開館、営業時間の延長の要望が前回同様にある。

教育学部の教員や事務職員の対応については、「教員を評価」「事務職員を評価」する記述は比較的大きな割合を占めるが、一方で双方への「不満」を示す記述も多く認められる。教職員への評価は、過去3年間を通じて大きな割合を占める。教員への不満として「教員間の問題」、「教職員の連携不足」があった。さらには、「ハラスメント」が指摘されていることに留意し、自覚を高めていきたい。

専攻・分野の組織や指導体制については、丁寧な指導、個別指導、幅広い指導などを指摘する記述が多い。また、講義と実習との結びつきを指摘する記述もある。一方で、種々の不満が見られる。

フリートキングで記述された内容には本学部で有意義に学生生活を送ったという記述も見られたが、一方で、様々な問題点が指摘された。全体として、臨床系の科目には期待が高いが、実際の履修にあたってはきめ細かな指導により、趣旨・目的や履修方法の徹底が求められているようである。学びの内容については、教職だけではないより広い視野での学びや進路選択上の支援を求める声がある。また、教科の専門性を高めるための学部の教育体制を求める記述もあった。

最後に本調査に協力いただいた学生諸君に感謝し、調査結果要約とする。

3. 過去3年間の年度別調査の分析

* 教育学部4年生の進路や取得教員免許の傾向

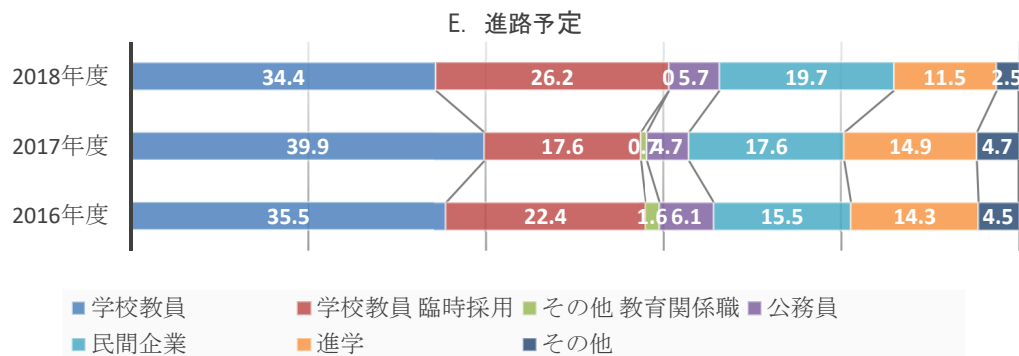
項目別の調査結果の分析の前に4年生の進路予定職種等(E進路予定)と取得見込みの教員免許数(F取得見込みの教員免許数の合計)の3年間の比率推移のグラフを下に示す。

進路予定を見ると、教員(正規)と教員(臨採)はやや変動はあるが、合わせるとおよそ6割弱である。2013年度~2015年度においては6割をキープしていたことと比較すると、注視する必要がある。一方、民間企業への就職は大幅に増え、進学は2016、2017年度にはやや持ち直したが、2018年度は減少している。取得見込み免許数については引き続き増加傾向である。取得見込み教員免許数3つが最も多く、次いで4つでありこれらを合わせると7割弱である。現在の民間企業の採用状況を反映して、教職、進学は減少し、民間企業就職が多くなった。

■ 年度別比較グラフ (2016~2018年度) (単位はすべて%)

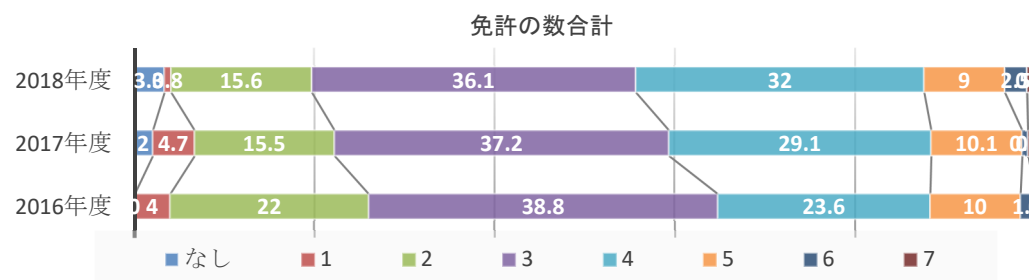
Q1 E. 進路予定

	学校教員	学校教員 臨時採用	その他 教育関係職	公務員	民間企業	進学	その他
2018年度	34.4	26.2	0.0	5.7	19.7	11.5	2.5
2017年度	39.9	17.6	0.7	4.7	17.6	14.9	4.7
2016年度	35.5	22.4	1.6	6.1	15.5	14.3	4.5



Q1 F2. 免許の数合計

	なし	1	2	3	4	5	6	7
2018年度	3.3	0.8	15.6	36.1	32.0	9.0	2.5	0.8
2017年度	2.0	4.7	15.5	37.2	29.1	10.1	0.7	0.7
2016年度	0.0	4.0	22.0	38.8	23.6	10.0	1.6	0.0



3. 過去3年間の年度別調査の分析

(1) 教育学部が目指す教育研究の実現度合

■年度別比較グラフ（2016～2018年度）（単位はすべて%）

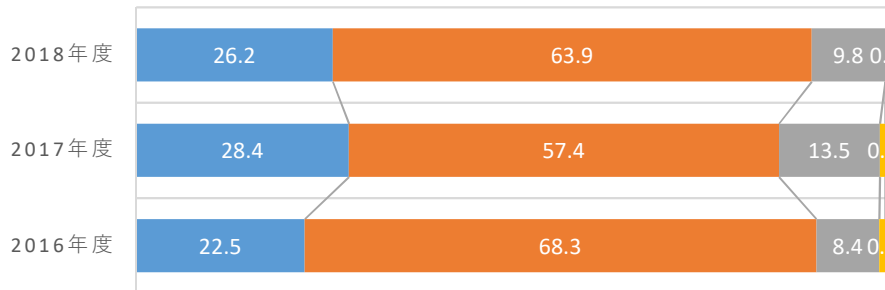
Q2 教育学部の教育研究についてうかがいます。

A 教育学部は「臨床の知」の理念にもとづいた教育・研究体制を目指しています。あなたの受けた専門教育にはこの目的に即した授業科目がありましたか。

	十分あった	まあまああった	あまりなかった	全くなかった
2018年度	26.2	63.9	9.8	0.0
2017年度	28.4	57.4	13.5	0.7
2016年度	22.5	68.3	8.4	0.8

A. 「臨床の知」の理念にもとづいた教育・研究

■十分あった ■まあまああった ■あまりなかった ■全くなかった

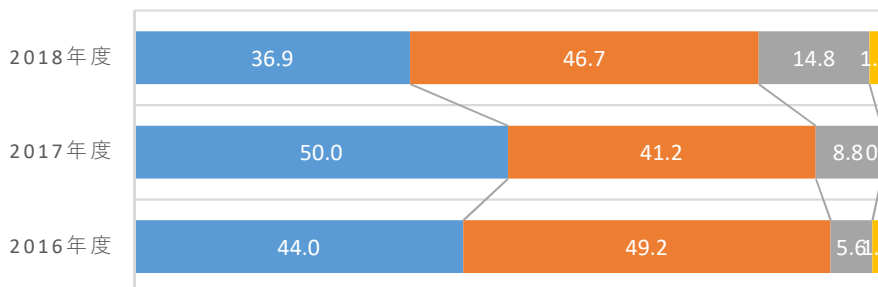


B 教育学部は附属学校園を積極的に活用した教育・研究体制を目指しています。あなたの受けた専門教育にはこの目的に即した授業科目がありましたか。

	十分あった	まあまああった	あまりなかった	全くなかった
2018年度	36.9	46.7	14.8	1.6
2017年度	50.0	41.2	8.8	0.0
2016年度	44.0	49.2	5.6	1.2

B. 附属学校園を積極的に活用した教育・研究

■十分あった ■まあまああった ■あまりなかった ■全くなかった

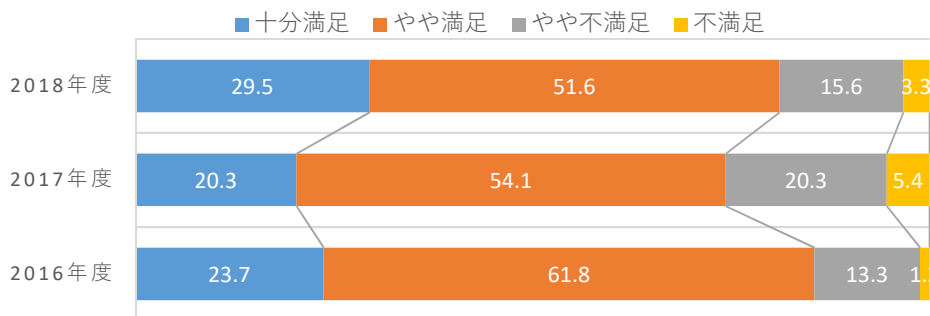


3. 過去3年間の年度別調査の分析

C 教育学部は地域社会と連携した教育・研究体制を目指しています。あなたの受けた専門教育にはこの目的に即した授業科目がありましたか。

	十分満足	やや満足	やや不満足	不満足
2018年度	29.5	51.6	15.6	3.3
2017年度	20.3	54.1	20.3	5.4
2016年度	23.7	61.8	13.3	1.2

C. 地域社会と連携した教育・研究



☆ 教育学部が目指す教育研究の実現度合の分析

教育研究について、まず、「臨床の知」の理念に基づいた授業科目が「十分あった」および「まあまああった」との合計回答は、2016年度90.8%、2017年度85.8%、2018年度90.1%であり、平均で88.9%と高い値を示した。前回調査時から高い満足度を維持している。「附属学校園の活用」に即した授業科目が「十分あった」および「まあまああった」との合計回答は、2016年度93.2%、2017年度91.2%、2018年度83.6%と、高い満足度を示しているが、やや減少傾向にあることに今後は注意しておく必要があるかもしれない。「地域社会との連携」については、その目的に即した授業科目が「十分あった」および「まあまああった」との合計回答は、2016年度85.5%、2017年度74.4%、2018年度81.1%で、平均80.3%と高い値を示した。前回調査時では6割程度であったことから、かなりの改善が図られたと言えるであろう。

3. 過去3年間の年度別調査の分析

(2) 授業内容、実施・評価方法等の満足度

○1年次での共通教育科目、専門科目他の満足度

■年度別比較グラフ（2016～2018年度）（単位はすべて%）

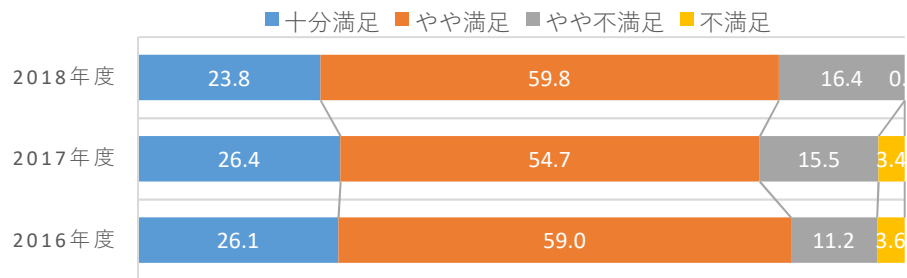
Q3. 次のそれぞれの項目に対して、あなたはどのくらい満足でしたか。

<1年次の講義科目全般>

E 共通教育科目の内容

	十分満足	やや満足	やや不満足	不満足
2018年度	23.8	59.8	16.4	0.0
2017年度	26.4	54.7	15.5	3.4
2016年度	26.1	59.0	11.2	3.6

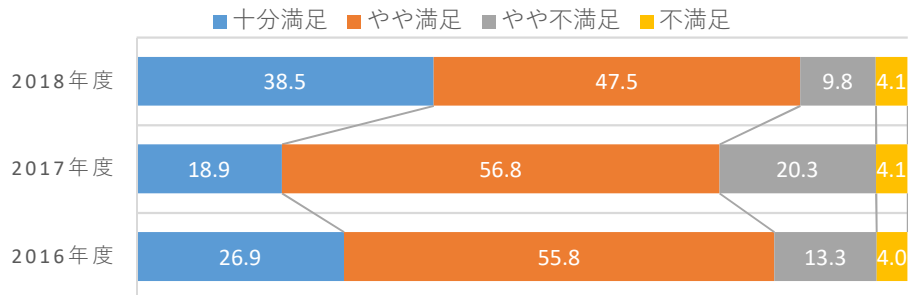
A. 共通教育科目の内容



B 専門科目（臨床科目を除く）の内容

	十分満足	やや満足	やや不満足	不満足
2018年度	38.5	47.5	9.8	4.1
2017年度	18.9	56.8	20.3	4.1
2016年度	26.9	55.8	13.3	4.0

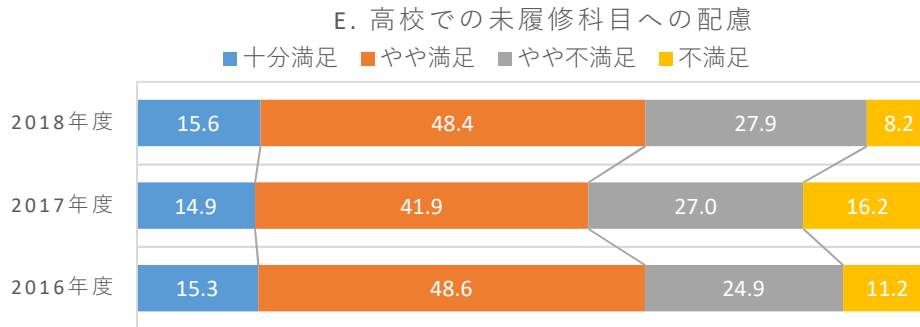
B. 専門科目（臨床科目を除く）の内容



3. 過去3年間の年度別調査の分析

E 高校での未履修科目への配慮

	十分満足	やや満足	やや不満足	不満足
2018年度	15.6	48.4	27.9	8.2
2017年度	14.9	41.9	27.0	16.2
2016年度	15.3	48.6	24.9	11.2



☆ 1年次での共通教育科目、専門科目他の満足度の分析

「A 共通教育科目の内容」については、2016年度には85.1%が満足（「十分満足」「やや満足」と回答しており、2017年度には81.1%、2018年度には83.6%であった。前回調査時から高い満足度を維持している。

「B 専門科目（臨床科目を除く）の内容」については、2016年度には82.7%が満足（「十分満足」「やや満足」と回答しており、2017年度には75.7%、2018年度には86.0%であり、高い満足度がうかがえた。しかし一方、「不満足である」との回答が、3年間一定数の割合（4.0～4.1%）あることも留意しておく必要があるであろう。

「E 高校での未履修科目への配慮」については、2016年度には63.9%が満足（「十分満足」「やや満足」と回答しており、2017年度には56.8%、2018年度には64.0%であった。これは前回調査時と同程度の満足度であった。高校での未履修科目への配慮が今後も望まれる。

3. 過去3年間の年度別調査の分析

○ 2年次以降の所属分野における専門科目、研究指導、教職科目の満足度

■ 年度別比較グラフ（2016～2018年度）（単位はすべて%）

Q3 次のそれぞれの項目に対して、あなたはどのくらい満足でしたか。

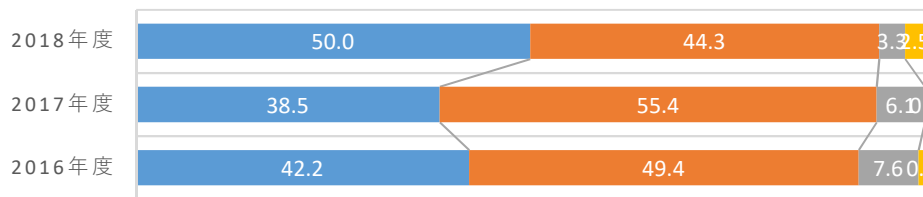
< 講義・演習科目（2年次以降） >

F 所属分野における専門科目

	十分満足	やや満足	やや不満足	不満足
2018年度	50.0	44.3	3.3	2.5
2017年度	38.5	55.4	6.1	0.0
2016年度	42.2	49.4	7.6	0.8

F. 所属分野における専門科目

■ 十分満足 ■ やや満足 ■ やや不満足 ■ 不満足

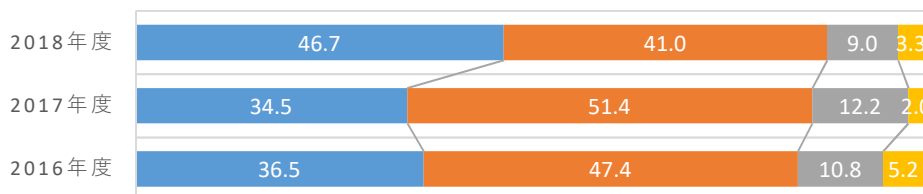


G 所属分野における研究指導

	十分満足	やや満足	やや不満足	不満足
2018年度	46.7	41.0	9.0	3.3
2017年度	34.5	51.4	12.2	2.0
2016年度	36.5	47.4	10.8	5.2

G. 所属分野における研究指導

■ 十分満足 ■ やや満足 ■ やや不満足 ■ 不満足



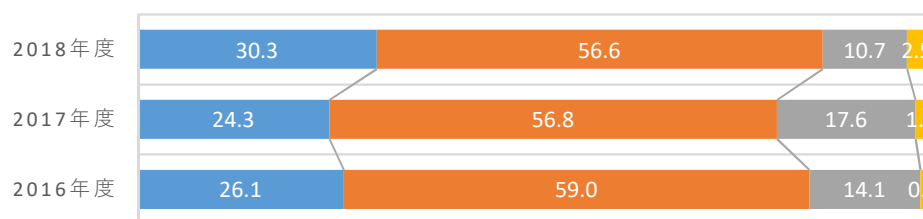
3. 過去3年間の年度別調査の分析

I 教職科目（臨床経験科目を除く）

	十分満足	やや満足	やや不満足	不満足
2018年度	30.3	56.6	10.7	2.5
2017年度	24.3	56.8	17.6	1.4
2016年度	26.1	59.0	14.1	0.8

I. 教職科目（臨床経験科目を除く）

■ 十分満足 ■ やや満足 ■ やや不満足 ■ 不満足



☆ 2年次以降の所属分野における専門科目、研究指導、教職科目の満足度の分析

「F 所属分野における専門科目」については、2016年度には91.6%が満足（「十分満足」「やや満足」）と回答しており、2017年度には93.9%、2018年度には94.3%と、前回調査時と同様9割を超える高い満足度を維持している。

「G 所属分野における研究指導」については、2016年度には83.9%、2017年度には85.9%、2018年度には87.7%が満足（「十分満足」「やや満足」）と回答しており、高い値で増加傾向を示している。

「I 教職科目（臨床経験科目を除く）」については、2016年度には85.1%が満足（「十分満足」「やや満足」）と回答しており、2017年度には81.1%、2018年度には86.9%と高い満足度を維持している。前回調査時は増加傾向が見られていたが、安定した高い満足度に落ち着いてきた様子が見える。

3. 過去3年間の年度別調査の分析

○臨床経験科目の満足度

■年度別比較グラフ(2016～2018年度) (単位はすべて%)

Q3 次のそれぞれの項目に対して、あなたはどのくらい満足でしたか。

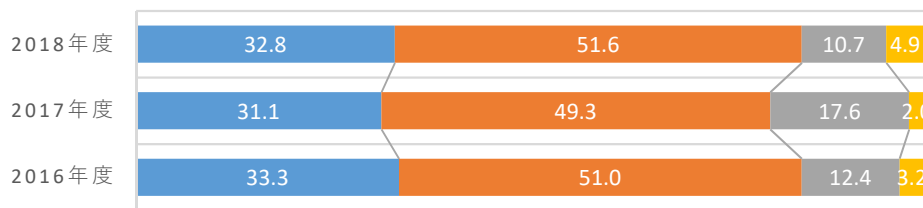
<臨床経験科目(2年次以降)>

K 教育実習 事前指導

	十分満足	やや満足	やや不満足	不満足
2018年度	32.8	51.6	10.7	4.9
2017年度	31.1	49.3	17.6	2.0
2016年度	33.3	51.0	12.4	3.2

K. 教育実習 事前指導

■十分満足 ■やや満足 ■やや不満足 ■不満足

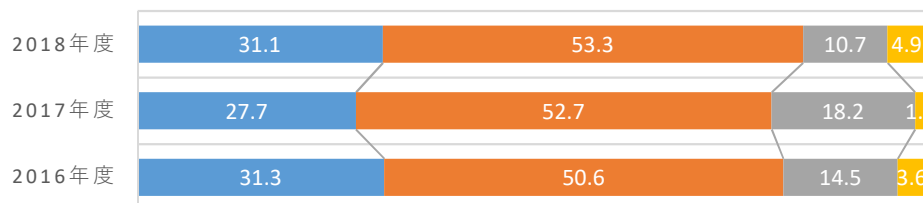


L 教育実習 事後指導

	十分満足	やや満足	やや不満足	不満足
2018年度	31.1	53.3	10.7	4.9
2017年度	27.7	52.7	18.2	1.4
2016年度	31.3	50.6	14.5	3.6

L. 教育実習 事後指導

■十分満足 ■やや満足 ■やや不満足 ■不満足



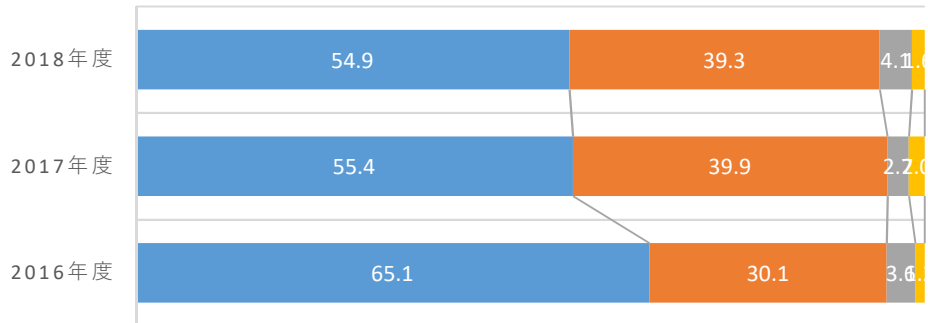
3. 過去3年間の年度別調査の分析

M 教育実習

	十分満足	やや満足	やや不満足	不満足
2018年度	54.9	39.3	4.1	1.6
2017年度	55.4	39.9	2.7	2.0
2016年度	65.1	30.1	3.6	1.2

M. 教育実習

■ 十分満足 ■ やや満足 ■ やや不満足 ■ 不満足



☆ 臨床経験科目の満足度分析

「K 教育実習 事前指導」において、2016年度では84.3%が満足（「十分満足」「やや満足」）、2017年度では80.4%、2018年度では84.4%が満足と回答した。前回調査時より平均で12ポイントも高い満足度を維持していることは特筆すべきである。

「L 教育実習 事後指導」については、2016年度は81.9%、2017年度は80.4%、2018年度は84.4%が満足（「十分満足」「やや満足」）と回答し、「K教育実習 事前指導」と同程度の値となった。これも前回調査時より、平均で13ポイントも高い値となっており、事前・事後指導とも大きな改善が図られたことがうかがえる。

「M 教育実習」については、受講者の評価は圧倒的に高い。2016年度は満足（「十分満足」「やや満足」）が95.2%、2017年度は95.3%、2018年度は94.2%が満足としていた。特に、十分満足の割合が、3年間平均で約6割あり、教育実習そのものの満足度が十分に高いことが示されている。

3. 過去3年間の年度別調査の分析

○授業のあり方・その他の満足度

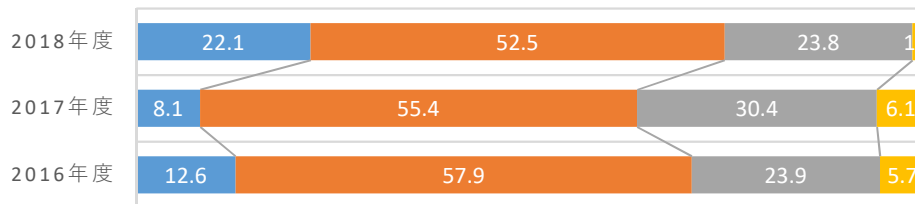
<授業のあり方・その他>

P 学生の理解度などをみながら授業を進める工夫

	十分満足	やや満足	やや不満足	不満足
2018年度	22.1	52.5	23.8	1.6
2017年度	8.1	55.4	30.4	6.1
2016年度	12.6	57.9	23.9	5.7

P. 学生の理解度などをみながら授業を進める工夫

■ 十分満足 ■ やや満足 ■ やや不満足 ■ 不満足

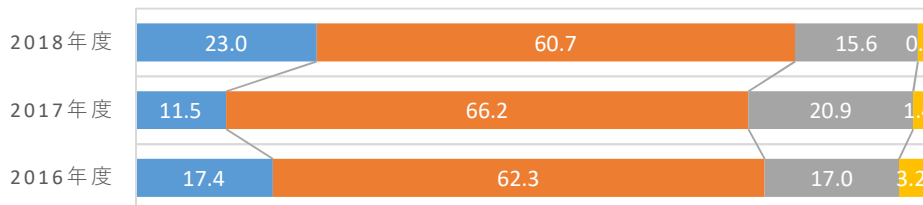


Q 適宜課題を出すなどして、理解度・応用力を見る工夫

	十分満足	やや満足	やや不満足	不満足
2018年度	23.0	60.7	15.6	0.8
2017年度	11.5	66.2	20.9	1.4
2016年度	17.4	62.3	17.0	3.2

Q. 適宜課題を出すなどして、理解度・応用力を見る工夫

■ 十分満足 ■ やや満足 ■ やや不満足 ■ 不満足



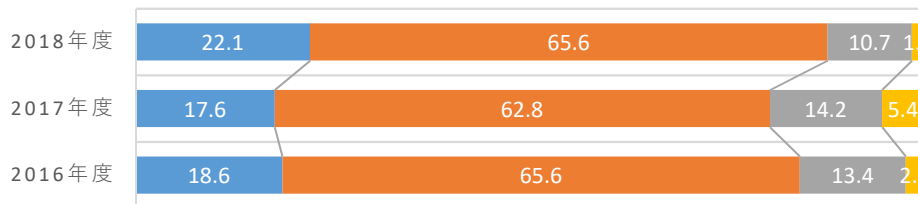
3. 過去3年間の年度別調査の分析

R 成績評価の方法

	十分満足	やや満足	やや不満足	不満足
2018年度	22.1	65.6	10.7	1.6
2017年度	17.6	62.8	14.2	5.4
2016年度	18.6	65.6	13.4	2.4

R. 成績評価の方法

■ 十分満足 ■ やや満足 ■ やや不満足 ■ 不満足

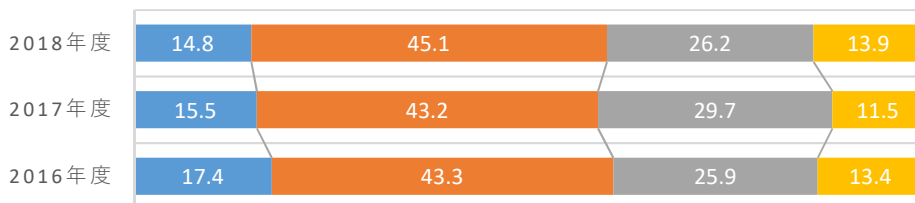


S 就職や進学のための支援や指導

	十分満足	やや満足	やや不満足	不満足
2018年度	14.8	45.1	26.2	13.9
2017年度	15.5	43.2	29.7	11.5
2016年度	17.4	43.3	25.9	13.4

S. 就職や進学のための支援や指導

■ 十分満足 ■ やや満足 ■ やや不満足 ■ 不満足



3. 過去3年間の年度別調査の分析

☆ 授業のあり方、その他の満足度の分析

「P 学生の理解度などをみながら授業を進める工夫」については、7割前後で満足（「十分満足」と「やや満足」）は推移している。2016年度は70.5%、2017年度は63.5%、2018年度は74.6%が満足としていた。前回調査時よりも平均で4.5ポイント増加した。

「Q 適宜課題を出すなどして、理解度・応用力をみる工夫」については、8割前後で満足（「十分満足」と「やや満足」）は推移している。2016年度は79.7%、2017年度は77.7%、2018年度は83.7%が満足と回答した。前回調査時よりもわずかであるが平均で1ポイント増加した。

「R 成績評価の方法」については、8割以上の満足（「十分満足」と「やや満足」）を維持している。2016年度は84.2%、2017年度は80.4%、2018年度は87.7%が満足と回答した。前回調査時よりもわずかであるが平均で0.8ポイント増加した。

「S 就職や進学のための支援や指導」については、6割前後で満足（「十分満足」と「やや満足」）は推移している。2016年度は60.7%、2017年度は58.7%、2018年度は59.9%が満足と回答した。平均値は前回調査時とほぼ同じである。「不満足」の割合が1割強と高いことに関しては、今後も支援や指導の改善が望まれる。

3. 過去3年間の年度別調査の分析

(3) 大学での学習と生活の充実度

■年度別比較グラフ（2016～2018年度）（単位はすべて％）

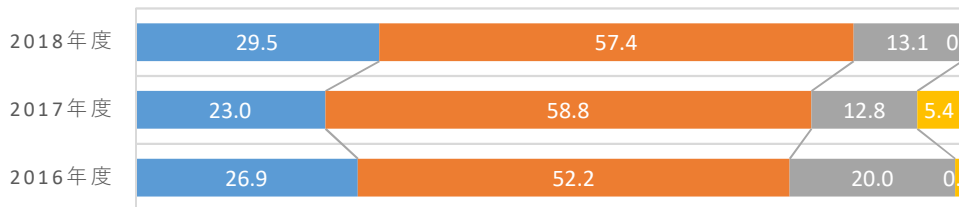
Q4 あなた自身の大学での学習・生活についておたずねします。

A1 自身の将来を見通し、系統的な履修ができた

	とても そう思う	やや そう思う	あまりそう 思わない	全くそう 思わない
2018年度	29.5	57.4	13.1	0.0
2017年度	23.0	58.8	12.8	5.4
2016年度	26.9	52.2	20.0	0.8

A1. 自身の将来を見通し、系統的な履修ができた

■とてもそう思う ■ややそう思う ■あまりそう思わない ■全くそう思わない

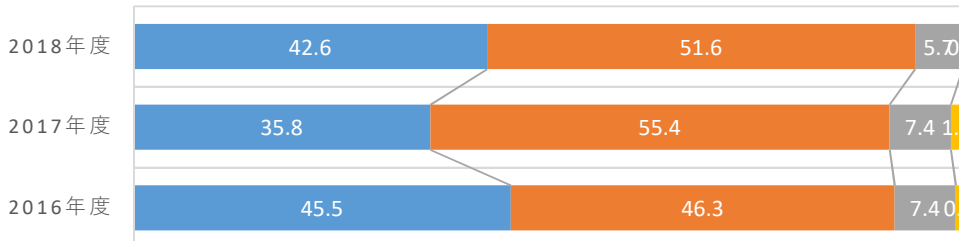


A4 教育実習などの実践的経験と講義内容とを相互に関連させつつ学べた

	とても そう思う	やや そう思う	あまりそう 思わない	全くそう 思わない
2018年度	42.6	51.6	5.7	0.0
2017年度	35.8	55.4	7.4	1.4
2016年度	45.5	46.3	7.4	0.8

A4. 教育実習などの実践的経験と講義内容とを相互に関連させつつ学べた

■とてもそう思う ■ややそう思う ■あまりそう思わない ■全くそう思わない



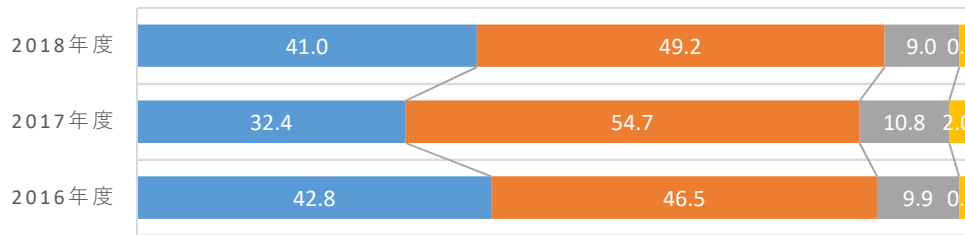
3. 過去3年間の年度別調査の分析

A5 大学生生活全般を通して豊かな知との出会い、学ぶことの意義を味わえた

	とても そう思う	やや そう思う	あまりそう 思わない	全くそう 思わない
2018年度	41.0	49.2	9.0	0.8
2017年度	32.4	54.7	10.8	2.0
2016年度	42.8	46.5	9.9	0.8

A5. 大学生生活全般を通して豊かな知との出会い、学ぶことの意義を味わえた

■とてもそう思う ■ややそう思う ■あまりそう思わない ■全くそう思わない

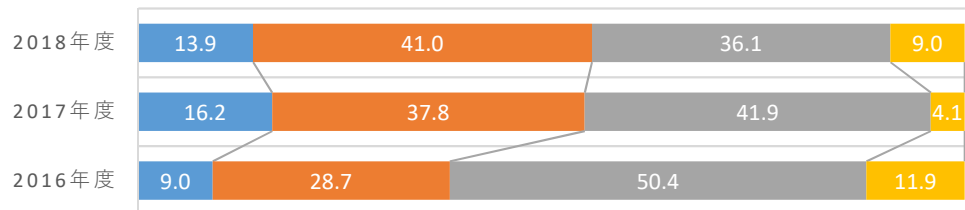


A6 免許や資格の単位獲得に追われ、専門分野の学びが疎かになった

	とても そう思う	やや そう思う	あまりそう 思わない	全くそう 思わない
2018年度	13.9	41.0	36.1	9.0
2017年度	16.2	37.8	41.9	4.1
2016年度	9.0	28.7	50.4	11.9

A6. 免許や資格の単位獲得に追われ、専門分野の学びが疎かになった

■とてもそう思う ■ややそう思う ■あまりそう思わない ■全くそう思わない



3. 過去3年間の年度別調査の分析

☆ 大学での学習と生活の充実度の分析

「A自身の将来を見通し、系統的な履修ができた」の設問は2010年度の調査で新設され、それ以降2014年度まで肯定的な回答（「とてもそう思う」「ややそう思う」）が75%から83%へと順調に伸びてきた（2010年度75%、2011年度78%、2012年度79%、2013年度81%、2014年度83%）。しかし、2015年度は75%と前年に比べ8%低下した。2015年度に卒業した学生（2012年度入学）から、学部改組にともなうカリキュラムの変更により、小中学校両方の免許が卒業要件となった。これにより前年度までにくらべ取得しなければならない単位数が大幅に増え、授業選択の幅が狭まったことを反映している可能性がある。しかし2016年度から2018年度にかけて、79.1%から86.9%と順調に伸びてきているので、前回のカリキュラム変更の成果が出てきていると考えられる。これに対して、「F免許や資格の単位取得に追われ、専門分野の学びが疎かになった」では、否定的な意見（「とてもそう思う」「ややそう思う」）は2016年度まで大きな変化はなかった（2013年度44.9%、2014年度46.0%、2015年度45.2%、2016年度37.7%）が、2017年度54%、2018年度54.9%と徐々に増え始めている。このことは単位数が大幅に増えたことが、専門分野の学びに影響を与えている可能性を示している。今後の動きに注視する必要がある。

このほか、「D教育実習などの実践的経験と講義内容とを相互に関連させつつ学べた」では肯定的な回答（「とてもそう思う」「ややそう思う」）が2010年度から2018年度まで71.5%から94.2%へと順調に上昇している（2010年度71.5%、2011年度80.1%、2012年度82.6%、2013年度85.2%、2014年度86.3%、2015年度91.2%、2016年度91.8%、2017年度91.2%、2018年度94.2%）。特にカリキュラムが変更になった2014年度から2015年度では約5%上昇し、その後も継続している。このことは、教育実習担当者の努力による改善と持続の結果であると考えられる。

「E大学生活全般を通して豊かな知との出会い、学ぶことの意義を味わえた」でも肯定的な回答（「とてもそう思う」「ややそう思う」）が2010年度から2018年度まで84.1%から90.2%へとほぼ順調に上昇している（2010年度84.1%、2011年度86.0%、2012年度87.7%、2013年度87.3%、2014年度86.4%、2015年度89.9%、2016年度89.3%、2017年度87.1%、2018年度90.2%）。特にカリキュラムが変更になった2014年度から2015年度では3.5%上昇している。このことは取得しなければならない単位数の増加に伴い授業選択の幅は狭まったかもしれないが、担当者の努力により、学びの質が向上し、それが持続していることがうかがえる。

3. 過去3年間の年度別調査の分析

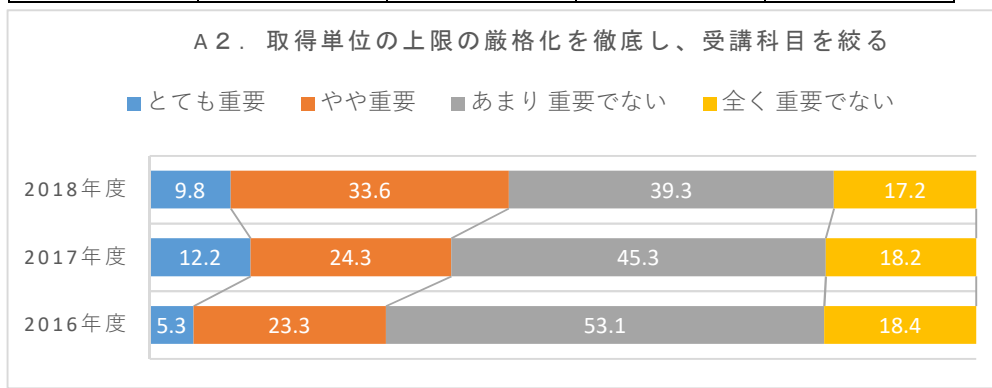
(4) 教育の充実のために何が重要か

■年度別比較グラフ（2016～2015年度）（単位はすべて%）

Q5 教育学部の教育を充実させるうえで、次の点はどのくらい重要だと思いますか。

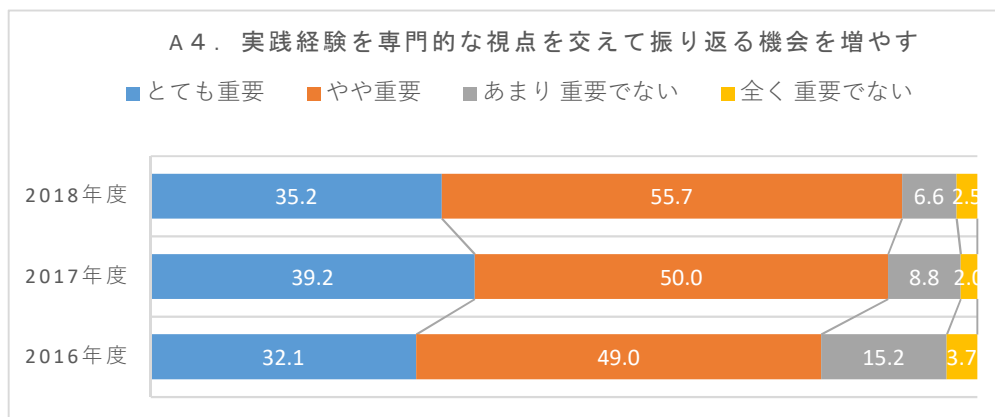
A2 取得単位の上限の厳格化を徹底し、受講科目を絞る

	とても重要	やや重要	あまり重要でない	全く重要でない
2018年度	9.8	33.6	39.3	17.2
2017年度	12.2	24.3	45.3	18.2
2016年度	5.3	23.3	53.1	18.4



A4 実践経験を専門的な視点を交えて振り返る機会を増やす

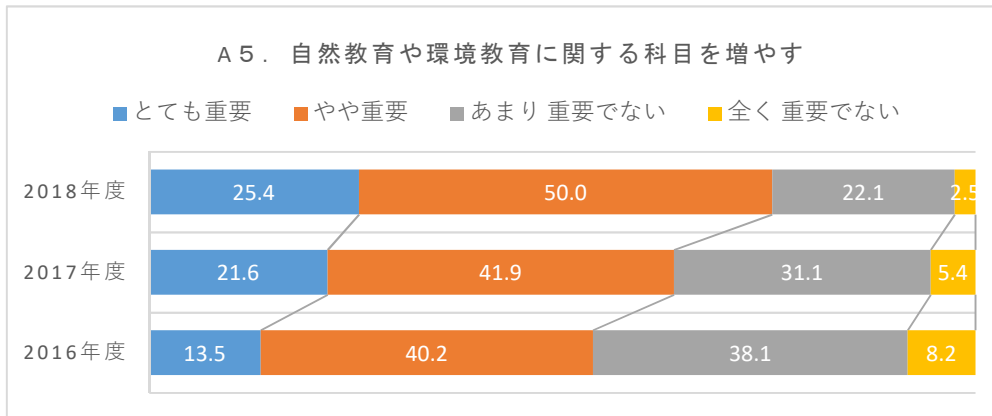
	とても重要	やや重要	あまり重要でない	全く重要でない
2018年度	35.2	55.7	6.6	2.5
2017年度	39.2	50.0	8.8	2.0
2016年度	32.1	49.0	15.2	3.7



3. 過去3年間の年度別調査の分析

A5 自然教育や環境教育に関する科目を増やす

	とても重要	やや重要	あまり重要でない	全く重要でない
2018年度	25.4	50.0	22.1	2.5
2017年度	21.6	41.9	31.1	5.4
2016年度	13.5	40.2	38.1	8.2



☆ 教育の充実のために何が重要かの分析

「B 取得単位の上限の厳格化を徹底し、受講科目を絞る」については、肯定的な回答（「とてもそう思う」「ややそう思う」）が、前々回の調査（2010～2012年度）では27.4%から35.8%へと徐々に増加し、前回の調査（2013～2015年度）では26.3%と21.5%から37.3%上下に変動した。今回の調査では2016年度は28.6%、2017年度は36.5%、2018年度は43.4%と徐々に増加した。しかしながら、全体とすれば否定的な回答（「あまり重要でない」「全く重要でない」）が55%を割っておらず、授業数を絞ることなく広く学びたいと願っているようである。

「D 実践経験を専門的な視点を交えて振り返る機会を増やす」という設問については、肯定的な回答（「とても重要」「やや重要」）が、前々回の調査（2010～2012年度）に引き続き、前回（2013～2015年度）と今回（2016～2018年度）も8割を超え、特に2018年度は9割を超えた。すなわち、実践に基づき専門分野について深く学び、それを生かしたいと考えていることが読み取れる。

「E 自然教育や環境教育に関連する科を増やす」については、肯定的な見方が前々回の調査（2010～2012年度）と前回の調査（2013～2015年度）では同様の傾向が示され、65%前後で推移した。今回の調査では53.7%から75.4%まで上下したが、特に2018年度には75.4%にまで増加したので、大学の中期目標の長野ならでの自然や環境について学ぶというコンセプトの提案と学生からのニーズがうまく調和し、高まったことがうかがえる。